

## 三報告に対するコメント（2）

久保 亨

力のこもった報告をして下さった3人の方に感謝したい。最初に3報告に共通する部分を確認し、そのうえで個別に若干の疑問点、ないし検討課題を提示する。

3報告はいずれも近現代中国における通時的な、ないしは構造的な問題群を扱っていた。すなわち農村社会の再編を分析した田原報告、西部開発を考察した吉澤報告、辺境地域の民族問題を論じた平野報告のいずれをとってみても、そこにおいて取りあげられた問題は、すでに1920～30年代の中国には明確に存在していたものであり、同時にまた21世紀を迎えた今も、厳然として存在しているものである。実は中国においても、たとえば現代の農業・農村・農民のいわゆる「三農問題」をめぐる議論の中で、1930年代の郷村建設論に手がかりを求めようとする研究潮流が存在する。また近代的な法制整備の方向性を民国期の模索の中に探ろうとして、民国時期の法律を対象に多数の法制史研究書が出版されている。現代中国が直面している課題の多くは20世紀を通じて存在してきたものであり、それらの課題を克服する道筋を考えるためには、歴史的なアプローチが大きな意味を持つことになる。3報告を聞き、改めてそうした思いを強くした。

3報告のもう一つの共通点は、それぞれの問題群の担い手に着目していたことである。田原報告の場合、とくに1950年代以降に農村社会の再編を担った在地リーダー層の分析に焦点を合わせていた。それに対し1930年代の西北開発政策の展開過程を追った吉澤報告の場合、政策の立案と提起に関わった知識人・経済官僚らを主な考察の対象としていた。また平野報告は清朝皇帝の政治理念と対比させながら、漢族官僚ないし政治家たちの民族観を問題にしていた。要するに3報告とも、農村・西北・辺境などの客観的な現実を踏まえつつ、その現実を認識すること自体をもって研究の最終目標にするのではなく、そうした現実に対して関わった主体の在り方までを究明しようとしている。そこまで踏み込む研究が求められている、ということになるのだろうか。

次にそれぞれの報告に即して若干の疑問点、ないし検討課題を提示したい。

田原報告から順に触れていく。第1に農村リーダー層に対する評価について。田原報告が現に存在する農村リーダー層に関して詳細な分析を提示していることは疑いない。しかし現在の農村幹部に対する調査が進めば進むほど、真の農村リーダー層は誰か、という問題が浮かびあがってくるのではないか。中央、省、県からの指示と農村の現実とがある程度対応している場合は、既存の農村幹部をそのまま農村リーダー層と見なしてよいのかもしれない。しかし仮にそこに大きな乖離が生じ、農民たちが上級政府に対し上訴に赴くような事態が生じた場合、その上訴の動きを担った人々たちが新たな農村リーダー層になる、という可能性もあるのではないか。歴史的に見ると、農民反乱を含め中国の農村社会は何度も大きな変動を繰り返しており、農村リーダー層も変遷を重ねてきた。そうした農村リーダー層の変わり目を認識する方法論も、必要になるのかもしれない。第2に、行財政機構としての県政府の弱さを歴史的に位置づけ、農村社会論を展開する必要があるのではないか。人民共和国以前の民国政府の時期にも、さらには清朝政府の時期にも、末端の県政府が行政的財政的に大きな権限を持った時期はなかった。近現代中国の農村社会において、近代国民国家の末端に位置する県政府との関係をどのように築くかという問題は、いわば歴史的な課題の一つであるように思われる。

次に吉澤報告について。すでに東京の中国現代史研究会で中間的な研究報告をうかがう機会があったので、大きな疑問点はない。2点、補足的な説明を求めたい。第1は宋子文ブレーン集団に対する評価である。欧米派と称されることが多く、実際、国民政府が国際連盟から技術援助を得たり、アメリカ政府から綿麦借款を受け入れたりする際、宋子文たちは主導的な役割を發揮した。しかしその一方、日本の侵略に対する抵抗という点では、民族主義的な立場を代表する面も持っていた。では彼らは、西北の在地勢力とは、どんな関係にあったのだろうか。その点も含め、宋子文ブレーン集団に対する総体的な評価を聞いておきたい。第2に、1930年代後半になると国民政府の下で議論は陝西・内蒙古などの「西北開発」から四川・雲南などの「西南開発」に急速にシフトしていく。日中関係の展開や国内統合の進展などが様々に影響したものであろうが、この間の事情については、どのように理解すればよいと考えるのか。

さいごに平野報告について。国民国家的な統合とは異なる帝國的な統合に着目することに異論はない。ただし同じように中華帝国と呼ばれる存在であっても、唐・元・清のように、全く異質の文化的社会的特徴を持った諸集団を統治しようとした帝国と、いわゆる漢民族主体の統治を押し進めた宋・明のような帝国とは、大きく異なっている。その点はどのように説明するのか（筆者注：この点に関し平野氏は、後の質疑の中で「漢民族中心の『中華帝国』とは異なる存在が清という前近代帝国であった」と回答されており、中華帝国という言葉が宋・明のような帝国に限定して使うべきだと考えておられるようである。但しその場合、唐・元・清のような帝国を何と総称すべきか、またある程度の連続性を持ちながら中国大

陸に興亡した諸帝国をどのように総称すべきか、といった問題は依然として残るように思われる)。また清朝の帝國的な統合原理が近代国民国家の統合原理とは大きく異なるものであったというのは、従来から多くの論者が指摘してきたことでもあるので、何が通説とは異なるのか、何を新たに実証したのかを明確に示していただきたい。

(くぼ とおる・信州大学)